

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：教育学科

資格：講師

氏名：井谷 信彦

研究分野	研究内容のキーワード
臨床教育学, 教育人間学, 教育思想	即興と教育, 教育者のタクト, 教育の現象学, ボルノウの教育思想
学位	最終学歴
博士(教育学), 修士(教育学), 学士(教育学)	京都大学大学院 教育学研究科 臨床教育学専攻 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 「学び発見ゼミノート」を用いた授業実践	2013年9月～現在	
2. 「教職実践演習(小)探求ノート」を用いた演習授業(他教員との共同担当)	2013年4月～現在	
3. 即興表現を用いた教員養成課程の授業実践	2013年4月～現在	
4. 即興表現を用いたコミュニケーション能力育成に関わる授業実践	2012年9月～現在	
2 作成した教科書、教材		
1. 遊び心とコミュニケーション 学び発見ゼミノート	2013年9月1日	
2. 教職実践演習(小)探求ノート(他教員との共同作成)	2013年4月～現在	
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 高等学校教諭第一種免許	2003年03月	国語科
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 『ワークで学ぶ道徳教育』	共	2016年3月	ナカニシヤ出版	読者が主体となって取り組めるワークを多く取り入れた教科書。主に道徳教育関連の授業で用いることを想定。第11章「ダメ!といわれるとやりたくない? 「悪いこと」子どものと人格形成」を執筆。古今東西の映画や絵本を題材としながら、子どもたちが「悪いこと」に惹かれる理由や、悪の体験と人格形成の関係を明らかにした。
2. 『ワークでまなぶ教育学』	共	2015年3月	ナカニシヤ出版	読者が主体となって取り組めるワークを多く取り入れた教科書。主に教育原理などの授業で用いることを想定。第14章「なぜ勉強しなくちゃいけないの? 子どもの問いに向きあうために」、第19章「ディスカッション テーマ集」を執筆。子どもと問いに共感しながら向きあうための作法と、教育の本質に関わるディスカッションのテーマを提示。
3. 『存在論と宙吊りの教育学——ボルノウ教育学再考』	単	2013年03月	京都大学学術出版会	哲学者M・ハイデガーの存在論を導きとして、現代ドイツの教育学者O・F・ボルノウの教育理論に孕まれている問題点を明らかにすると同時に、特にハイデガー哲学を規定している「知の宙吊り」とも呼ぶべき方法を精査することで、ボルノウ教育学をはじめ現代の教育/教育学が抱えている問題点を克服しうるような、新たな教育/教育学の構想を提示。
4. 『臨床の知: 心理臨床学と教育人間学からの問い』	共	2010年11月	創元社	心理臨床学と教育人間学の視点から、心理臨床や教育実践に関わる「臨床の知」の在り方を精査。第六章「宙吊りにされた『知』の形式 危機に関わる『知』としての『臨床の知』」ほかを執筆。危機と生の成熟に関するO・F・ボルノウの理論が孕んでいる

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
				問題点を明らかにすると同時に、M・ハイデガーの「予感」「合図」という概念を導きとして、危機に関わる「知」としての「臨床の知」の特徴を説明。（矢野智司・桑原知子編著）
2 学位論文				
1. 「存在論と『宙吊り』の教育学：ボルノウ教育学の再考を軸に」	単	2011年03月	京都大学に提出、学位（教育学）を授与された、博士論文	哲学者M・ハイデガーの存在論を導きとして、現代ドイツの教育学者O・F・ボルノウの教育理論に孕まれている問題点を明らかにすると同時に、特にハイデガー哲学を規定している「知の宙吊り」とでも呼ぶべき方法を精査することで、ボルノウ教育学をはじめ現代の教育／教育学が抱えている問題点を克服しうるような、新たな教育／教育学の構想を提示。
3 学術論文				
1. Toward the Spiral of Questioning : A Manner of Thinking and Writing for Philosophers of Education after 3.11	単	2016年11月	English E-Journal of the Philosophy of Education. vol. 1	・教育学者O. F. ボルノウと哲学者M. ハイデガーによる著作を導きとして、東日本大震災によって深刻な被害を蒙り、日常生活を支える様々な境界と根拠が失われた現代社会にあつて、教育哲学者が取りうる語りの作法を提唱。希望、被護性、技術、放下などをめぐる両者の議論が、重大な矛盾や自家撞着を孕んでいることを明らかにしたうえで、唯一絶対の「答え」ではなく終わりなき「問い」を喚起するような、哲学者に固有の語りの特徴と意義を説明。※井谷信彦（2013）「問いの螺旋へ——教育哲学者の語りの作法」『教育哲学研究』第108号の加筆・修正・英訳版
2. タクトの啓発と意味生成の螺旋 ヴァン＝マーネンの省察理論の循環構造	単	2015年3月	『学ぶと教えるの現象学研究』vol. 16	ヴァン＝マーネンの省察理論に見られる循環構造に関する疑問を出発点として、意味への問いと意味の発見を往還しながら問い深められてゆく、意味生成の螺旋としての省察の構造を説明。
3. 風景芸術と教育の『再生』 建てること、住まうこと、制作すること	単	2015年3月	『理想』694号	風景芸術の手法を用いた図画工作の授業のなかで、児童や講師らによって生きられた経験を、存在論の視座に基づいて省察することで、都市、学校、人間、教育の「再生」に関わる、この実践の意義を説明。
4. 問いの螺旋へ——教育哲学者の語りの作法	単	2013年11月	『教育哲学研究』第108号	O・F・ボルノウとM・ハイデガーによる著作を導きとしながら、東日本大震災によって深刻な被害を蒙り、日常生活を支える様々な境界と根拠が失われた現代社会にあつて、教育哲学者が取りうる語りの作法を提唱。
5. 「タクトの啓発と「ありうること」への開放——ヴァン＝マーネンの省察理論と意味生成の沃野」	単	2013年03月	『教育学研究論集』第8号	教育者のタクトに関するM・ヴァン＝マーネンの理論を導きとして、「ありうること」への開放という契機に着眼することで、事例の省察を通じたタクトの啓発という出来事の内実を説明。
6. O.F.ボルノウ『練習の精神』とメビウスの輪	単	2012年03月	『教育学研究論集』第7号	O・F・ボルノウの議論に孕まれている「ねじれ」に着眼することで、彼の著作『練習の精神』に潜在している、読者の「問い」を喚起するようなダイナミズムを説明。
7. 「主体性の超克は現か夢か：『不眠症』の時代の教育思想」	共	2010年09月	『近代教育フォーラム』第19号	M・ハイデガーの存在論、G・パタイユの超越論、E・レヴィナスの他者論を導きとして、「主体性の超克」という課題に孕まれている困難と、この困難を乗り越えるための指針を提示。（井谷信彦、宮崎康子、平石晃樹）
8. The Aporia of the Other in Curriculum Construction: A Response to Anna Strhan (revised)	単	2010年03月	『臨床教育人間学』第10号	A・シュトラーンの議論への応答として、E・レヴィナスの説く「他者」の問題を、宗教教育のカリキュラムに組み込むことの困難と、この困難を乗り越えるための指針を提示。
9. 「存在論に立脚した教育理論の展開：『有用化としての教育』に対する問いかけを軸に」	単	2009年03月	『京都大学大学院教育学研究科紀要』第55号	M・ハイデガーの存在論を拠り所とする従来の教育理論が、「有用化としての教育の克服」という課題を共有しており、この課題に特有の困難を抱えていることを説明。
10. 「『住まうこと』と世界の奥行き：O. F. ボルノウ『新しい庇護性』再考」	単	2008年11月	『教育哲学研究』第98号	「住まうこと」をめぐるM・ハイデガーの論稿を導きとして、「新しい庇護性」に関するO・F・ボルノウの理論の意義と問題点を説明。
11. 「プレゼントが開く未知なる教育：児童文学や絵本を事例として」	共	2008年09月	『近代教育フォーラム』第17号	「プレゼント」が描かれている児童文学や絵本にヒントを得ながら、単なる等価交換には還元することのできない、人間の生と教育の奥行きを説明。（井谷信彦、宮崎康子、石崎達也、辻敦子）
12. 'Beyond the self' as a goal of education: Heidegger's philosophy and education in the West and in Japan (revised)	単	2008年03月	『臨床教育人間学』第9号	M・ハイデガーの存在論を拠り所とする従来の教育理論が、「自己の超越」という課題を共有しており、この課題に特有の困難を抱えていることを説明。
13. Comments: How to Read "Beyond the Self"? (revised)	単	2007年03月	『臨床教育人間学』第8号	P・スタンディッシュの著作『Beyond the Self』へのコメントとして、本書を「どのように」読むべきかという視点から、幾つかの論点を提示。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
14. 「無気味なるものをめぐる思索のスタイル：O. F. ボルノウ『新しい庇護性』を読み直す」	単	2007年03月	『臨床教育人間学』第8号	O・F・ボルノウの著作『新しい庇護性』の冒頭箇所を精読することで、単純な論理には絡め取ることのできない、人間の生に関わる「無気味なるもの」を思索するための方法を解明。
15. 「受苦的な経験における生の可能性：O. F. ボルノウ『非連続的な生の形式』再考」	単	2007年03月	『京都大学大学院教育学研究科紀要』第53号	「現存在の本来性／非本来性」に関するM・ハイデガーの論稿を導きとして、非連続的な生の形式」に関するO・F・ボルノウの理論の意義と問題点を解明。
16. 「希望、この無気味なるもの——O. F. ボルノウ『希望の哲学』再考」	単	2006年11月	『教育哲学研究』第94号	「不安」をめぐるM・ハイデガーの論稿を導きとして、「希望」に関するO・F・ボルノウの理論の意義と問題点を解明。
17. 「教育との関連における気分の哲学的『発見』——M. ハイデガー『存在と時間』以前のバトス解釈」	単	2005年05月	『教育哲学研究』第91号	『存在と時間』以前のM・ハイデガーの論稿を導きとして、教育との関連で「バトスのなもの」を論じる際の困難を明らかにするとともに、この困難を乗り越えるための課題を提起。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 光を教育哲学する プラトン、コメニウスからフィンク、パトチカへ	共	2015年10月	教育哲学会第58回大会 ラウンドテーブル	プラトンやコメニウスによる「光」をテーマとする教育思想と、フィンクやパトチカによるその受容を検証することで、「光」をテーマとする教育哲学の可能性を探求。（田端健人、相馬伸一、武内大、井谷信彦）
2. 「主体性の超克は現か夢か：『不眠症』の時代の教育思想」	共	2009年9月	教育思想史学会第19回 大会コロキウム	M・ハイデガーの存在論、G・バタイユの超越論、E・レヴィナスの他者論を導きとして、「主体性の超克」という課題に孕まれている困難と、この困難を乗り越えるための指針を提示。（井谷信彦、宮崎康子、平石晃樹）
3. The Aporia of the Other in Curriculum Construction: A Response to Anna Strhan	単	2009年3月	The 2nd International Colloquium between the Institute of Education, University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto University	A・シュトラーンの議論への応答として、E・レヴィナスの説く「他者」の問題を、宗教教育のカリキュラムに組み込むことの困難と、この困難を乗り越えるための指針を提示。
4. 'Beyond the Self' as a Goal of Education: Heidegger's Philosophy and Education in the West and in Japan.	単	2008年3月	International Colloquium between the Institute of Education, University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto University	M・ハイデガーの存在論を拠り所とする従来の教育理論が、「自己の超越」という課題を共有しており、この課題に特有の困難を抱えていることを解明。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 「いま教育哲学者はいかに未来を語るができるか——教育と将来世代への責任」	単	2013年10月	教育哲学会第56回大会 ラウンドテーブル	O・F・ボルノウとM・ハイデガーによる著作を導きとしながら、東日本大震災の後、現代の教育哲学者が取りうる語りの作法を提唱。また、他の登壇者からの報告内容についてコメントを提示。
6. 研究費の取得状況				
1. 「教育における宗教性に関する思想的・人間学的研究——「京都学派」教育哲学を中心に」研究分担者		2012年4月～ 2015年3月	研究代表者 西村拓生	京都学派の哲学者や、これに関わる思想家、さらにこの影響を受けた教育学者などの理論を精査することで、宗教性や超越性といった契機が人間形成にとって有している意義を解明。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2015年9月～現在	教育思想史学会 事務局長補佐
2. 2015年9月	「アクティブ・ラーニングだいげんきゅう！」コーディネーター
3. 2015年3月	「ダイバーシティ・ダイアログ 教育×きょういく！」ゲスト・スピーチ
4. 2015年10月	教育哲学会第58回大会 一般研究発表 司会
5. 2015年1月	「遊びと学びのパラドックスを遊ぶ」講演&ワークショップ
6. 2013年4月～2014年9月	大人の楽々コミュニケーション講座@武庫川女子大学附属幼稚園
7. 2013年4月～現在	即興表現を用いたコミュニケーション能力育成のモデル開発・実践
8. 2013年10月	教育哲学会第56回大会 一般研究発表 司会
9. 2012年8月	西宮市立総合教育センター主催 10年次教員研修 講師
10. 2012年4月～現在	演劇の手法を用いた双方向型の教員研修のモデル開発

学会及び社会における活動等

年月日	事項
11. 2012年11月	関西教育学会第64回大会 自由研究発表 司会
12. 2011年4月～現在	演劇の手法を用いた学校教育実践のモデル開発・実践
13. 2011年11月～2012年11月	日本乳幼児教育学会第22回大会準備委員